

◎今年度の成果

大館市立城南小学校からは、深い学びをもたらす学び合い場面である「シンカタイム」で、ロイノートを互いの考えの接点として活用した事例が紹介されました。

男鹿市立船川第一小学校では、「秋田の探究型授業」の学習過程ごとに活用できるICT機能を整理した「船一スタンダード」で、活用する教科の幅を広げました。

湯沢市立湯沢西小学校では、問いを見いだすための状況把握において、ICTの特性を踏まえた資料提示が行われました。

能代市立能代第一中学校からは、生徒のICT活用に関する意識と資質・能力との相関関係をふまえたICT活用の事例が紹介されました。

大瀧村立大瀧中学校では、柔道の授業において、動画による動きの確認（デジタル）と実技（アナログ）を往還することで、効率的に技能の向上が図られました。

横手市立横手南中学校では、情報活用能力とICT操作スキルを一体的に育てるための、教科等横断的なカリキュラム・マネジメントが行われました。

ホームページ等でこの他の多くの成果も共有していただきたいと思います。

◎今後への期待

①児童生徒の意思で展開する授業を

大正期に国語授業実践家として知られた芦田恵之助は、「随意選題」を提唱しました。作文を書くか否かを児童生徒の「随意」に委ねるといえるものです。また彼は「発動的学習態度」を重んじました。自発的・主体的に学習する態度のことです。真の探究とはこうしたものではないでしょうか。探究や問いを押しつけるのではなく、探究を始動するための問い（必要感）の生成を支援することが教師の役割であると思います。

一人で持て余す問題に接した児童生徒は、自然と支援要請（Help seeking）をします。船川第一小学校では、「自力解決」における児童の「困り感」を拾って「協働的な学び」へ展開しています。真に必要な感があり効果のある協働が実現しています。個の学びも協働の学びも、意に反して強制されてしまっは「個別最適」ではありません。教師が提供する情報に問いを見だし、その追究や解明を決めるのは児童生徒自身であるべきです。自己決定・自己選択の権限がある学習は、学習対象や友だちの考えを知りたいという欲求を生み、「自分事」として主体的に結果を確認する意識を喚起します。したがって、協働的な学びや自己総括的評価が自然に行われるのです。

②児童生徒にこそ「授業研究」を

教師は授業を見合って「授業研究」をしますが、児童生徒は授業を見合って学びのあり方を研究してはいません。船川第一小学校の「ICTを使った授業の様子」の廊下掲示は、児童による「授業研究」の始まりです。「ICT活用の手引き」も児童用が必要ではないでしょうか。能代第一中学校のICT活用予定表による相互授業参観や授業動画の蓄積・共有は、教師だけでなく生徒にも広げられないでしょうか。教師が視点を提案したり効果を解説したりして、あるべき学びの姿を共有することで、教師と児童生徒双方のICT活用力が向上するでしょう。年1回でもいいのです。子どもの授業参観（動画視聴でも）をしてみませんか。

③「授業づくり」を基盤にすえて

船川第一小学校では、「ICTを使うようになって、自分の考えを持つ子どもが増えた」そうです。しかし、単にICTを使ったからではないと思います。協働学習が大切にされているからだだと思います。自分の考えを持たずに参加しても協働学習から得るものは少ないと児童が分かっているのです。一人一人の参加が真に求められるような授業であることが大切です。ICTが効果を発揮するか否かは、教師の「授業づくり」の如何にかかっているのではないのでしょうか。

その上で、やはりICTを活用することは重要です。自らの授業スタイルの良否に気づくことや、あるべき授業像を更新していくことを促すからです。その結果、「秋田の探究型授業・進化形」ができあがってくるのだと思います。

両方が大切なのですが、授業そのものの充実があってこそそのICT効果なのだと言うことを、今一度銘記したいものです。

ICTを効果的に活用した「秋田の探究型授業」は「研究フェイズ」から「普及フェイズ」へ

GIGAスクールをきっかけとした「ICTを効果的に活用した『秋田の探究型授業』」への挑戦が始まった令和3年度は、いずれの学校においても手探り状態で、「研究フェイズ」の印象が強いものでした。しかし、令和4年度は、1年間の取組を踏まえて各学校の重点的取組が明確となり、単にICTをどう使うかではなく、「問題を発見し、他者との関わりを通して主体的に問題を解決していく子ども」を育成するために、「問題を発見する場面」、仮説・予想を立て「解決方法を見通す場面」、他者との関わりを通して「問題解決を図る場面」、「問題解決を振り返る場面」のそれぞれで、いかにICTの活用効果を最大化し、それらの共有をいかに行うかを工夫した実践がたくさん見られました。

1. 誰もができるようにするための「各教科・各場面での学び方とICT活用モデル」

そのような実証研究の中で、全国各地の実践と比較して秋田県独自の優れた取組として、男鹿市立船川第一小学校の「船一スタンダード」をはじめとした、各学校での教科等の問題発見・解決学習の各場面での学び方と効果的・具体的なICTの活用方法を対照させた「各教科・各場面でのICT活用モデル」の創出があります。これは、全教科共通の各場面ごとの効果的なICT活用法だけでなく、各教科特有の効果的なICT活用法も明らかにしています。

これを見れば子どもたちだけでなく、他校の教師もまねすることができる「普及フェイズ」における極めて秀逸なツールとなるもので、

「秋田の探究型授業」を積み重ねてきた秋田県特有のものでもあります。令和5年度にはこれらを基に「秋田県スタンダード」の小学校版、中学校版（授業の4類型を単元の中でどう位置付けるかを含む）を創出し、それらを基に子どものノートに貼っていつでも児童生徒が参照できるよう各教科ノートの1ページ目に貼る「秋田県スタンダード：シートバージョン」と、掲示物として教室や校内に貼る「秋田県スタンダード：掲示物バージョン」を、モデル校の先生方が協働して開発できれば、県内すべての学校にこれまでの実証研究の成果を普及させことにつながると考えられます。これは、他県でも秋田県のを参考にアレンジして取り入れるところが始めているほど魅力的なものでもあります。

2. 学術的知見と実証研究成果に基づく全教科等共通の「秋田県情報活用能力育成系統表」のバージョンアップを

上記1のこれまでの実証研究の成果と、「問題発見・解決学習における思考モデル」「問題発見の4つの方法」「授業の4類型と育成される学力」などの授業設計論の学術的知見に基づき、全教科等共通の学び方とICTの効果的活用法をとりまとめ、「秋田県情報活用能力育成系統表」をバージョンアップすることにより、「問い」を発する子ども（問題を発見し、他者との関わりを通して主体的に問題を解決していく子ども）の育成が、県内小・中・高校で推進できるようになると考えられ、令和5年度に是非実施していただきたいと考えています。令和5年度には、自分がどうしたらよいかを探究する「研究フェイズ」から、皆ができるようにするにはどうしたらよいかを探究する「普及フェイズ」の研究をしていただきたいと考えています。

体育館廊下に掲示された「船一スタンダード」と各教科特有のICT活用の具体的場面の写真



問題発見・解決学習における思考モデル

